

目次

第11講	助動詞(7)	62
第10講	助動詞(6)	56
第9講	助動詞(5)	50
第8講	助動詞(4)	44
第7講	助動詞(3)	38
第6講	助動詞(2)	32
第5講	助動詞(1)	26
第4講	形容詞・形容動詞と係り結び	20
第3講	動詞(2)	14
第2講	動詞(1)	8
第1講	古文入門	2

第12講	助詞(1)	68
第13講	助詞(2)	74
第14講	紛らわしい語の識別(1)	80
第15講	紛らわしい語の識別(2)	86
第16講	敬語(1)	92
第17講	敬語(2)	98
第18講	和歌の修辞	104
第19講	漢文入門	110
第20講	漢詩	116
付録	文語文法要覧	122

第5講 助動詞 (1)

基礎学習

1 助動詞の接続と活用

野球やサッカーなどのスポーツを観戦するとき、メンバー表とポジションがわからないと見ていても面白くありませんよね。一人一人の選手の区別がつかないからです。助動詞の学習も同じです。助動詞には、同じような形の語がたくさん出てきます。これを一つ一つ区別できなくては、古文は読解できませんし、当然面白くありません。そして、一つ一つの助動詞を区別するのに絶対必要なのが、助動詞の接続と活用の知識です。メンバー表やポジションのようなものだと思うので、早めに覚えてしましましょう。主要な助動詞は二十八語あります。

助動詞の接続とは、各助動詞の上の語の活用形のことです。助動詞は、それぞれ自分が接続する相手を決めています。例えば、〈打消〉の助動詞「ず」は未然形にしか接続しませんし、〈過去〉の助動詞「けり」は連用形にしか接続しません。助動詞の学習は、まず、この接続を覚えることから始めましょう。

未然形接続	る・らる・す・さす・しむ・ず・じ・む〔ん〕・むず〔んず〕・まし・まほし (11語)
連用形接続	つ・ぬ・たり〔完了・存続〕・けり・き・けむ〔けん〕・たし (7語)
終止形接続	らむ〔らん〕・らし・べし・まし・めり・なり〔伝聞・推定〕 (6語)
体言または連体形接続	なり〔断定〕・たり〔断定〕・ごとし
	サ未四已接続 り

確認問題

四段活用動詞「咲く」に次の助動詞を接続させると、どのような形になるか。例にならって答えよ。

- | | | | | |
|-----|-----|---|-----|---|
| (例) | ず | 〔 | 咲かず | 〕 |
| (1) | ぬ | 〔 | | 〕 |
| (3) | む | 〔 | | 〕 |
| (2) | めり | 〔 | | 〕 |
| (4) | ごとし | 〔 | | 〕 |

↓終止形接続の助動詞は、ラ変にだけは特別に連体形に接続するので、そのことも覚えておこう。

↓「サ未四已接続」とは、サ変動詞の未然形または四段動詞の已然形に接続するということ。「り」という助動詞は、このように非常に特殊な接続をするので注意しよう。「サ未四已」で「サミシイ」と読み、「サミシイ」〈完了〉の「り」と覚えておこう。

確認問題 解答

- (1) 咲きぬ (2) 咲くめり
(3) 咲かむ (4) 咲くごとし

次に助動詞の活用の仕方覚えましょう。助動詞の活用は、主要助動詞二十八語の活用表をすべて暗記してもよいのですが、それは、少し大変です。ほとんどの助動詞は、用言のいずれかとはほぼ同じ活用をしますから、何と同じタイプかを分類して覚えてしまえば、一つ一つの活用表は暗記せずに済みます。活用のタイプで分類してみますので、覚えてください。

特殊型	ず・き・まし	無変化型	らし・じ
ラ変型	たり(完了・存続)・なり(伝聞・推定)・めり・けり・り・たり(断定)・なり(断定)		
形容詞型	べし・まし・まほし・たし・ごとし		
四段型	む(ん)・らむ(らん)・けむ(けん)	サ変型	むず(んず)
			ナ変型
			ぬ
下二段型	る・らる・す・さす・しむ・つ		

確認問題

次の助動詞を、(例)にならって()内の指示に従って活用した形を答えよ。

- (例) めり(連体形) () める ()
- (1) べし(已然形) ()
- (2) けむ(連体形) ()
- (3) ぬ(連用形) ()
- (4) つ(未然形) ()
- (5) むず(連体形) ()
- (6) らる(已然形) ()

接続と活用を一通り覚えたら、次に、各助動詞の意味や用法の詳細を勉強しましょう。

2 「打消」の助動詞「ず」

【活用】 特殊型なので、しっかり覚えておきましょう。形容詞とちよつと似ています。

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	
ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	○	基本活用
ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	○	補助活用

↓助動詞の活用の覚え方は、

- ① 特殊型と無変化型をまず覚える。特に特殊型は、一つ一つの活用表をしっかりと暗唱すること。

② ①の助動詞以外は、

「り」 ↓ラ変型

「し」 「じ」 ↓形容詞型

「む(ん)・らむ(らん)・けむ(けん)」 ↓四段型

「むず(んず)」 ↓サ変型

「ぬ」 ↓ナ変型

のように整理して覚える。

- ③ ①②以外の助動詞が出てきたら、すべて下二段型。

確認問題 解答

- (1) べけれ (2) けむ (3) に
- (4) て (5) むざる (6) らるれ

↓「ず」の活用は、形容詞と同じようにできたものと考えられる。補助活用の役割も形容詞と同様、主に助動詞を接続するためと考えればよい。

【接続】 「ず」は未然形接続です。

【意味】 〈打消〉 ～ナイ

3 〈過去〉の助動詞「き」「けり」

【活用】 「き」は特殊型、しつかり暗唱しましょう。「けり」はラ変型です。

基本形	き	けり
未然形	(せ)	(けら)
連用形	○	○
終止形	き	けり
連体形	し	ける
已然形	しか	けれ
命令形	○	○

【接続】 「き」「けり」とも連用形接続です。「き」は、カ変とサ変は未然形にも接続します。

【意味】 a 〈過去〉 ～タ

ただし、「き」と「けり」の間には、

き ……話者の直接体験の過去(～タ)

けり……伝聞した過去(～タソウダ)

という相違点があります。

b 〈詠嘆〉の「けり」 ～ダッタノダ・～(ダ) ナア

過去から続いてきたことに、今初めて気づいた驚きを表します。別名〈気づき〉の「けり」。

確認問題

次の文中から、助動詞「ず」「き」「けり」をそのまま抜き出し、文中での活用形を答えよ。

- (1) 花なむ咲かぬ。〔 〕
- (2) 花こそ咲きしか。〔 〕
- (3) 花ぞ咲きける。〔 〕

↓ 「き」の未然形「せ」は、「せば」という形でしか出てこない。また、「けり」の未然形「けら」は、上代にのみ用例が見られる。

↓ 活用表中の「○」は、その活用形の用例が存在しないことを示している。「○」の位置については、あまり神経質にならなくてもよい。

↓ 「話者の直接体験」というのは、話し手が直接自分で体験したこと、あるいは目撃したことという意味。したがって、話者が動作の主体にならなくても、話者がその場で見聞きしたことに對しては、「き」を用いることができる。

↓ 「き」と「けり」は、現代語に訳すときには同じと考えてよい。

↓ 〈詠嘆〉の「けり」は、あることに気づいた驚きを表すが、このような場合、現代語では、「～ダッタ・～ダッタノダ」という表現をすることがある。「あつ、明日は試験だった」などというのがそれ。「～ダッタ」と言うとは過去の表現のようだが、〈詠嘆〉の「けり」の訳語としても許容。

確認問題 解答

- (1) ぬ・連体形 (2) しか・已然形
- (3) ける・連体形

基本問題

1 次の文中の傍線部は、「動詞＋助動詞」の組み合わせである。例にならって、①動詞の活用形を答え、②助動詞を終止形に直して答えよ。

例 花ぞ咲きける。

① 連用形 ② けり

(1) 稲荷に思ひおこして詣でたるに、……。

① ②

(2) 巳の時ばかりに成りにけり。

① ②

(3) ただなる所には目にも止まるまじきに、……。

① ②

(4) あはれなる人を見つるかな。

① ②

(5) この君よりほかに、まさるべき人やはある。

① ②

2 次の文中から、例にならって助動詞「ず」「き」「けり」をそのまま抜き出し、文中での活用形と、この意味を答えよ。

例 花ぞ咲きける。

〔 ける 連体形 過去 〕

(1) 九重のうちに鳴かぬぞ、いとわろき。

〔 連体形 過去 〕

(2) 下り行きしこそ、……これが身にただいまならばやとおほえしか。

〔 連体形 過去 〕

(3) 月のいとほなやかにさし出でたるに、「今宵は十五夜なりけり」と思し出でて、……。

〔 連体形 過去 〕

(4) 春の野に若菜摘まむと来しものを散り交ふ花に道はまどひぬ

〔 連体形 過去 〕

1 **出典**
 (1)(2)(3)「枕草子」(第4講演習問題参照)
 (4)(5)「源氏物語」

ヒント
 助動詞の接続と活用を思い出すこと。解法の手順としては、

①動詞の活用の種類を割り出して、活用形を考える。

②動詞の活用形がある程度しほれたら、その活用形に接続する助動詞をすべて挙げてみて、その活用のタイプを吟味し、助動詞を決定。

例えば、(1)の場合、動詞「詣づ」は、下二段活用動詞だから、「詣で」は未然形か連用形である。あとは、未然形接続と連用形接続の助動詞を思い出して、その中から候補をしぼっていく。

2 **出典**
 (1)(2)「枕草子」(2)は第4講演習問題参照
 (3)「源氏物語」(4)「古今和歌集」

ヒント
 (3)「今宵は」とあることに注意。

(4)助動詞「き」はカ変動詞に接続する場合、特殊な接続になる。「こし」「こしか」と未然形に接続することができるのである。

次は「土佐日記」の一節で、作者一行の乗った船が室津の港で、悪天候のため出港できずにいるときのことを記したものである。

二十日。昨日のやうなれば、船出ださず。みな人々憂へ嘆く。苦しく心もとなければ、ただ、日の経ぬる数を、「今日いく日」「二十日」「三十日」と数ふれば、指も（損なふ・る・ぬ・べし）。いとわびし。夜はいも寝ず。二十日

の夜の月（出づ・ぬ・けり）。山の端もなく、海の中よりぞ出で来る。かやうなるを見てや、昔、安倍の仲麻呂といひける人は、唐土に渡りて帰り来ける時に、船に乗るべき所にて、かの国人、馬のはなむけし、別れ惜しみて、かしの漢詩作りなどしける。飽かずやありけむ、二十日の夜の月出づるまでぞありける。その月は、海よりぞ出でける。これを見てぞ、仲麻呂の主、「わが国に、かかる歌をなむ、神代より神もよん結び、今は上中下の人も、かうやうに別れ惜しみ、喜びもあり、悲しびもある時には、詠む」とて、詠めりける歌、

青海ばらふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

とぞ（詠む・り・けり）。かの国人聞き知るまじく、思ほえたれども、言の心を、男文字に様を書き出だして、この言葉伝へたる人に、言ひ知らせければ、心をや聞きえたりけむ、いと思ひのほかになむ賞でける。唐土とこの国とは、言異なるものなれど、月の影は同じ事なるべければ、人の心も同じことにやあらむ。さて、今、そのかみを思ひやりて、ある人の詠める歌、

都にて山の端に見し月なれど波より出でて波にこそ入れ

（「土佐日記」）

重要古語

心もとなければ || じれったいので。
 安倍の仲麻呂 || 奈良時代の漢詩人。
 唐に留学、玄宗皇帝に仕え、三十
 数年後、帰国を試みるが、果たせ
 ぬまま長安で没した。
 馬のはなむけ || 送別の宴。
 よん結び || お詠みになり。
 上中下の人 || 身分の高い人も低い人
 も。
 ぶりさけ見れば || 遙か遠く仰ぎ見
 と。
 春日 || 奈良市街東方の丘陵地。
 かも || 詠嘆の終助詞。
 男文字 || 漢字。
 この言葉伝へたる人 || 日本語を習
 得している人。
 そのかみ || その当時。

問一 ①～③の()内の語を活用して、適当な形に改めよ。

① [] [] []

② [] [] []

問二 傍線部a～dの「ける」「けれ」の中で、異なるものを一つ選び、その記号を答えよ。

[] [] [] []

問三 二重傍線部「三笠の山に出でし月」について、「三笠の山に出でける月」と言ったときとの違いを具体的に説明せよ。

[] [] [] []

問四 本文の内容と一致するものを、次の中から一つ選び、番号を○で囲め。

- 1 室津の港の山の端から出た月を見て、作者は昔、中国で安倍仲麻呂が詠んだ歌を思い出した。
- 2 安倍仲麻呂は、送別の宴を開いてくれた中国の人達に、日本の神様の詠んだ歌を送った。
- 3 仲麻呂は、歌の概略を漢字で書き表し、日本語を理解できる人に歌の意味を説明した。
- 4 仲麻呂から歌の意味を聞いた中国の人達は、月に対する人の感じ方は同じはずなのに、共感してくれなかった。
- 5 作者は、仲麻呂の歌を思い出して、仲麻呂が都で見た月が、今、室津の波間から昇ったという歌を詠んだ。

UNIT

問一 助動詞の接続と活用を思い出して組み合わせること。

問二 助動詞の接続をチェックしてみよう。c「けれ」の上の語は、〈使役〉の助動詞「す」である。

問三 助動詞「き」「けり」は、両方とも〈過去〉の助動詞だが「き」には、話者の直接体験というニュアンスがある。